

日本哲学会第 77 回大会公募ワークショップ

哲学史研究の哲学ケーススタディ編

ライプニッツ研究の場合

配布資料

2018 年 5 月 20 日 神戸大学

内容

1. 発表要旨
2. 池田真治 「ライプニッツと哲学史研究の哲学」
3. 稲岡大志 「色彩と逆光：数理哲学者としてのライプニッツ・オルタナティブ」
4. 質問フォーム

オーガナイザー：植村玄輝(岡山大学)

池田真治(富山大学)・稲岡大志(神戸大学)・坂本邦暢(東洋大学)

過去の哲学者やその学説に関する哲学史的な研究が、「この研究に哲学的な意義があるのか」という問題に直面しがちだということ、日本の哲学アカデミアのなかで広く認知されているといっているはずである。こうした事情を背景に、日本哲学会でも、2017年大会のシンポジウムとして、「哲学史研究の哲学的意義とは何か？」が企画された。本ワークショップのオーガナイザーも提題者として登壇した同シンポジウムは、哲学史研究と哲学研究の関係を論じるにあたって考慮すべき事柄をあらためて整理し、今後の議論を実り豊かにするための土台作りには一定の貢献をしたように思われる。とりわけ、属する世代と(もっとも狭い意味での)専門領域の異なる研究者が提題をすることで、同シンポジウムは、この問題に関する論点や切り口の多様さを洗い出した。こうした成果を受けて次に必要とされるのは、「哲学史研究の哲学的意義とは何か？」という問題にまつわる個別の論点について、より個別的な場面に即して議論を深めることだろう。この課題に応えるために、本ワークショップでは、「哲学史研究におけるアナクロニズム(時代錯誤)」という問題について、ライブニッツの数理哲学を事例としたケーススタディを行う。

ここでいう「アナクロニズムの問題」とは、大まかに言えば、過去の哲学者やその学説に関する研究に、現代の術語・概念・問題などを持ち込むことの是非をめぐる問題(を、どちらかといえば「非」の側の観点から表現したもの)である。この問題は、哲学史研究が置かれたいささか特異な状況を、とりわけよく浮き彫りにしているように思われる。すでに述べたように、哲学史研究には哲学的な意義が求められる傾向にある。ここで問題になるのはどうせん現代の私たちにとっての哲学的意義であって、研究対象となっている時代の人々にとっての意義ではない。こうした要求に応えるために、いま流通している哲学の術語・概念・問題を用いて哲学史研究を行うことは、(必須であるかどうかはさておき)きわめて有効な手段となる。過去の哲学の術語・概念・問題よりも(少なくとも相対的に)馴染みがあり、(少なくとも相対的に)明確な定義や定式化が施されたそれらに訴えることは、自分の研究の哲学的意義を認めさせたい相手と疎通を行うことを容易にするからである。しかしこうした試みには、過去の哲学者により歴史的な関心からアプローチする、科学史やインテレクチュアル・ヒストリーなどの分野の歴史研究者たちから厳しい批判がなされてきた。哲学史を研究することの眼目は、過去の哲学者やその学説をまさに過去のものとして理解することにあるのだから、ターゲットとなる哲学者やその同時代人が知る由もない術語・概念・問題を利用した再構成は、少なくとも哲学史研究の主要な目的ではなく、場合によってはこの目的を阻害するというのである。

このように、哲学史研究は、一方の(主に哲学アカデミアの住人や哲学に期待を寄せるその他の人たちからの)哲学的な意義の要求と、他方の(主に歴史家たちからの)歴史研究としてのまともさの要求のあいだで板挟みの状態にある。アナクロニズムの問題にどのように対応するかは、二つの要求に対する態度を決めることにほかならないのである。哲学的な意義を優先するのか、それとも歴史研究としてまともであることを選ぶのか、そもそも二つの要求はトレードオフの関係にあるものとしていつでも理解さ

れなければならないのか——こうした問題を、ここでまずもって問わなければならない。また、哲学史研究において避けるべきである(とされる)アナクロニズムの正確な内実を突き止めることも必要である。過去を過去のものとして理解するのが歴史研究の眼目だとしても、そうした理解の主体がいうまでもなく現代の私たちである以上、私たちがいま手にしている哲学上の術語・概念・問題は、歴史としてまともであろうとする哲学史研究にとっても、完全に切り捨てることのできるものではないだろう。そうだとすると、いま私たちが手にしているリソースを(どのように)使うべきかは、個別の事例に即して判断されるべき事柄だということになる。

以上からもわかるように、哲学史研究におけるアナクロニズムという問題は、ケーススタディという形式で取り上げるにふさわしい。では、なぜそこでライブニッツの数理哲学なのか。ライブニッツは、哲学史上の重要人物であることが広く認められているものの、一次資料の編纂が現在も進行中であるという事情も手伝って、現代的な哲学的関心からも、より歴史的な関心からも、さまざまな研究の可能性を残した哲学者である。そして、扱った問題の広範さゆえに、ライブニッツは、哲学的な意義が特に求められないような文脈、たとえば科学史やインテレクチュアル・ヒストリーにおいても主題となりうる哲学者でもある。こうした事情を背景に、ライブニッツを主題とした哲学史研究では、先に述べた二つの要求を背景とした、研究者のあいだの対立や葛藤が特に顕著に見られるのである——このことは、本ワークショップの提題でも確認されることになる。以上を踏まえたとき、数理哲学という話題は、特に興味深いように思われる。ライブニッツの時代までに登場した数学の概念(証明、定義、記号、矛盾、関数など)は、現在まで特に深い断絶なく数学において用いられてきている。そのため、ライブニッツの数理哲学に関する哲学史的研究において避けられるべきアナクロニズムがあるとしても、それが何なのかを突き止めるためにはかなり繊細な議論が必要になるからである。

以上の点を含め、本ワークショップでは、先に述べた二つの要求を受け止めつつライブニッツの数理哲学について研究する池田の稲岡の2名が、アナクロニズムの問題について提題を行う。池田の提題は、無限小の概念や連続体の問題にまつわる哲学的な関心の追求が、ライブニッツの数理哲学に関する哲学史研究とどのように関係するのかについて、自身の研究が直面する問題に触れながら報告する。それに対して稲岡は、図形推論や空間概念の数学的表現に関する現代の議論を手掛かりにしたライブニッツ研究というプロジェクトを題材として、主に哲学史の方法論について報告する。これら二つの提題を通じて、哲学的な意義の要求と歴史研究としてのまともさの要求にどのように応えるべきかに関する両者の見解の相違が、ライブニッツの数理哲学という共通の背景のもとで浮き彫りになることが期待される。次に池田と稲岡の提題に対して、科学史/インテレクチュアル・ヒストリーという観点からライブニッツに関心を寄せる坂本がコメントを行う。これによって、哲学的意義の要求を大きく引き受ける池田・稲岡の見解が、そうした要求が特に重要にならない文脈でどのように評価されるのかの一端が示されるだろう。これらの報告とそれを題材としたディスカッションによって、哲学史研究と哲学の関係という一筋縄ではいかない問題について、議論の共有を進めることができれば、本ワークショップは成功裡に終わることになる。

ライブニッツと哲学史研究の哲学——連続体の数理哲学史に向けて——

池田 真治

哲学史は、哲学と歴史という二つの対象を志向する学問分野である。哲学史がその双方を志向する以上、その研究の本性として、(1) 哲学的意義を求めて現在との連関を求める傾向、および (2) 歴史的厳密性を求めて過去のコンテクストへと向かう傾向、この二つのジレンマにさらされざるをえない。

このジレンマについては、すでに 2017 年度の日本哲学会大会シンポジウム「哲学史研究の哲学的意義とは何か?」において、詳しく議論された<sup>1</sup>。とりわけ植村は、「哲学史研究は哲学的かつ歴史的でありえるのか」という問題に対し、哲学史研究は、適切に行えば、現在の哲学の相対化を可能にすると主張し、その有効な方法として、「歴史的・規範的アプローチ」を提案した。哲学的アプローチ vs. 歴史的アプローチという対立に対して、たとえばローティは棲み分けの提案をするが、そこでは真理の問題は二極化されてしまう。また、レルケのように、哲学史家は学説の哲学的メリットについて徹底的に無関心になるべきだとする立場もある。植村は、こうした対立を乗り越えるために、折衷的モデルを提案する。すなわち、一方で、哲学的アプローチの陣営は、時代錯誤的であることを自覚すべきである。他方で、歴史的アプローチの陣営といえども、真理の問題から免責されるべきではない。こうして植村は、時代錯誤を避け、かつ、真理の問題を主題的に扱うモデルとして、「歴史的・規範的アプローチ」を提案する。それは、主張の構成的規則に注目し、「ある主張がなされるのは、それが真であるときに限る」、つまり「真でないことを主張するな」を規範とする。こうして歴史的探求に哲学的探求の規範を埋め込むことより、哲学史研究者が、哲学史における誤読について、より適切な主張の解釈と再構成を行うことができるという。また、誤解で忘れ去られてしまった哲学の問題を復活させることもできるという。もっとも、歴史的な探求であると同時に哲学的な探求であることを目指すアプローチは、各々の哲学史研究者が、各々の課題においてすでに実践していることであろう。たとえば村上は、現代の哲学を発展の頂点とみなす進歩的哲学史観を批判し、ある主題に関する論争を「理由の系列としての哲学史」として描くことを提唱した<sup>2</sup>。それによれば、現代哲学の観点からはおよそ関心を向けられないテーマ、たとえば「神の存在論的証明」なども、理由の系列の中で有意義に問い直すことができる。村上は、異なる時代の異なる「ものの見方」の発見を通じて、現代を批判的に反省することにこそ、哲学史の意義があると見ているが、これも同様の路線であろう。この方針に、基本的に異論はない。

むろん、いくつかの問題は依然として残されている。たとえば松田の発表との関連で言

<sup>1</sup> (1) 松田克進「哲学史研究の哲学的意義——哲学史との間合いの取り方」、(2) 植村玄輝「哲学史研究は哲学的かつ歴史的でありえるのか——過去の主張についての規範的探求という観点からの提案」、(3) 納富信留「始まりを問う哲学史——複眼的ギリシア哲学史への試み」、『哲学』第 68 号、日本哲学会編、2017 年、(1) 9-27 頁、(2) 28-44 頁、(3) 45-62 頁。

<sup>2</sup> 村上勝三「理由の系列としての哲学史」『知と存在の新体系』知泉書館、2017 年、4-26 頁。

例えば、哲学史研究には、現代哲学や他の分野に比べ、費やしたエネルギーに見合うだけの成果が得られない、という哲学史自身に「収穫逦減の法則」を適用した場合に関する問題がある。しかし、少なくとも哲学史の哲学業界内部における意義については、全体としてある程度の意義を認めることができるという結論に達したものと思われる。

そこで、本発表では、「ライプニッツ研究の場合」ということで、哲学史の哲学外部における意義について問題提起したい。多様な分野で活躍したライプニッツは、哲学業界外部からも関心を向けられる場合が多々あり、他分野が要求する研究基準にもある程度応えなければならないからである。まず、近年のライプニッツ研究における歴史学のアプローチの浸透という観点から、今後のライプニッツ研究のあり方を反省してみたい (1, 2)。そして、いまだ研究の入り口に來たばかりの自らの研究で恐縮だが、私がテーマとしている「連続体の迷宮」、および、自身が専門としている「数理哲学史」のアプローチについて、数学史や他の諸科学との関係を考察しつつ、今後の研究の方途を模索してみたい (3, 4)。

## 1. ライプニッツ研究の近年の傾向

### 1-1. 「ライプニッツ・ルネサンス」に見るライプニッツの特殊性

幸いなことに、哲学史研究において、ライプニッツはつねに注目されてきた。19世紀末から20世紀初頭にかけて、ゲルハルト版をはじめとするライプニッツ著作集の刊行、および、数学の基礎をめぐる論争が重なった。このことにより、ラッセル、クーチュラらのいわゆる「論理主義」的解釈が登場した。またカッシーラーの体系的研究が出版されるなど、大物がライプニッツを扱ったことの影響もあり、「ライプニッツ・ルネサンス」が花開く。それは、一時期のブームにとどまらず、現象学への影響（フッサール、ディートリッヒ・マーンケ、ハイデガーなど）や、数学の哲学への影響（ヘルマン・ヴァイル、ゲーデルなど）へと展開する。以降も、フランス現代思想への影響（ドゥルーズ、ミシェル・セールなど）や、1970-80年代の言語分析哲学への影響（石黒ひで、ベンソン・メイツなど）と、ライプニッツ・ルネサンスの影響は長期に渡った。

後世の哲学者への影響や、現代の諸科学への影響という観点から見ると、哲学史研究の中でも、ライプニッツの場合はかなり特殊であろう。しかし、哲学史における哲学者の意義は、哲学者への影響や、現代科学への影響によって単純に測られるものではない。それに、過去の哲学者に対するこうした後の時代から見た評価は、アナクロニズムに陥る危険がある。ライプニッツ・ルネサンスがようやく落ち着きを見せたように思われる今、哲学史におけるライプニッツの意義とは何か、冷静に見つめることがまさに問われている。

### 1-2. ここ半世紀における歴史的研究の革新

そうした中で、現代では、ライプニッツの思想の発展を描く、歴史重視のスタイルの研究が主流であるという印象を受ける。ライプニッツの最終的な体系を描く研究も依然とし

であるが<sup>3</sup>、ガーバーやフィッシュンらはそのような「最終的な体系」がライプニッツにあったことに懐疑的である。フィッシュンは、ライプニッツの思想がその最後まで、決して固定されることはなくつねに変わってきたのであり、何かライプニッツに固定的で最終的な体系があると考えるのは幻想だ、という立場をとっているように見受ける<sup>4</sup>。ライプニッツ自身は完成された体系を希求し、そのために多くの論者と議論を重ね、体系の原理や要約に当たるものをいくつも書いた（その一つが晩年の『モナドロロジー』）。また、誰かが自身の書いたものを体系的にまとめてくれることを期待さえもした。しかし、アイデアが尽きることなく、そのつど自らの考えを更新していった結果、自身が目指すところの最終的な体系には至らなかった、というのが実情である。ガーバーも、初期や中期にすでに晩年のモナドの考え方があったというような「モナド論的読み方」をするのは無意味だとして、歴史学的アプローチを採用し、モナドロロジーに至るまでの時系列的な思想の発展を描く<sup>5</sup>。

こうした歴史的な研究動向は、アカデミー版が順次出版されるに伴い、クロノロジカルな厳密性を重視する歴史学的手法が、ライプニッツ研究にも可能となった結果であろう<sup>6</sup>。ライプニッツ研究は、こうした歴史研究の側面だけでなく、電子化による原典資料の利用可能性、そして学会や論争・出版を通じた知識の共有といった点で飛躍的に向上している<sup>7</sup>。資料へのアクセスや議論の共有の可能性の向上は、ライプニッツ研究の歴史学的傾向を一層後押ししてもいよう。

ライプニッツが試行錯誤のなかで辿り着いた「もっとも見込みがありそうな体系」というものを最終的な体系として描き出す試みも、十分意義があると思うが、その場合、ライプニッツの観点から「もっとも見込みがありそうな体系」なのか、それとも、哲学的な観点から「もっとも見込みがありそうな体系」なのか、問題になろう。前者は歴史学的観点が強くなるだろうし、後者は現代的観点が強くなるだろうからである。

たとえば、ラッセルのアプローチは、完全に後者だった<sup>8</sup>。ラッセルは、『ライプニッツの哲学の批判的解説』の第一版への序文で、自身の哲学史に対するスタンスを明快に説明している。これを今振り返ることは有意義である。なぜなら、ラッセルは、時代や場所の影響、哲学者の体系の発展、および思想の発展の原因といった歴史的側面の探求が、哲学史の主流だと認識していたからだ。そうした歴史的問いに答えるには、教育、社会、政治、科学などについての包括的知識を要する。しかし、そうした歴史的研究では、諸哲学の関係ばかりが問われて、哲学そのものが無視される傾向があると言う。そこでラッセルは、過去の哲学者に向かう純粋な哲学的態度がありうると主張する。なぜなら、真に傑出した

<sup>3</sup> Glenn A. Hartz, *Leibniz's Final System: Monads, Matter and Animals*, Routledge, 2007.

<sup>4</sup> Michel Fichant et Paul Rateau, « Leibniz en 1716 : une dernière philosophie ? » *Les études philosophiques*, Juillet 2016-3, 315-317.

<sup>5</sup> Daniel Garber, *Leibniz: Body, Substance, Monad*, Oxford University Press, 2011.

<sup>6</sup> *Leibniz: Sämtliche Schriften und Briefe*, hrsg. von der Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Darmstadt, Leibniz und Berlin, 1923-.

<sup>7</sup> Catherine Wilson, "Why Do We Study Leibniz (After 300 Years)?", *The Leibniz Review*, Vol. 26, 2016, 1-9.

<sup>8</sup> Bertrand Russell, *A Critical Exposition of The Philosophy of Leibniz*, (1st ed.: 1900), 2nd ed.: 1937, Reprinted by Routledge, 1997.

哲学者においては、諸々の見解はその哲学者の体系内において密接に結びついており、それらを学ぶことで重要な哲学的真理を得ることができるものだからである。また、過去の諸哲学はいくつかの大きなタイプに属するので、そのようなある哲学の基礎が何であるかも検討しうる。そして、その体系の整合性を問うことで、その哲学に対する根本的な反論を問うことができる、と主張する。

ラッセルは、そうした哲学的探求にあって、「哲学者は心理学的に説明されるものではない」と主張する。つまり「彼がこの見解に至ったのはいかなる発展のプロセスによってか」という歴史的問いは、「この見解が正しいかどうか」という哲学的問いとは論理的に無関係である。こうして、ラッセルにとって、「歴史的事実ではなく、哲学的真偽が、この探求において第一に注意を要する事柄である」<sup>9</sup>。

そこで、哲学的研究としては、ライプニッツがなぜモナドや不可識別者同一の原理、理由律などを考えたのか、といった哲学的問いが主導しなければならない。ラッセルは同書で、モナド論が一連のライプニッツの学説から、いわば理由の連鎖として演繹されることを示そうとした。そしてその本は、その後の英語圏のライプニッツ研究に決定的な影響を与えた。こうして、ライプニッツの哲学がほとんど彼の論理学から導かれたものである、とするその書の主要テーゼは、数年後に出版されたクーチュラの『ライプニッツの論理学』と共に、ライプニッツの論理主義的解釈として広く知られるようになったのである。

これに対し、歴史的アプローチの立場では、ある時点でのライプニッツの考えについて深く研究するほうが、歴史的に厳密であり、考察される範囲や資料の観点からも謙虚で信頼できるものとなる。こういった研究を、仮に「定点観測」アプローチとでも名づけよう。歴史的アプローチあるいは「定点観測」アプローチで考えられる欠点は、固定された時点に集中することでかえって全体像を見えにくくしたり、現在との関連や哲学的な問題関心から離れることで哲学的洞察や現代的意義をわかりづらくすることである。たとえば、ガーバーの研究は中期ライプニッツがメインであるし、「連続体の迷宮」に関するアーサーやビーリーの研究は、前期に集中している<sup>10</sup>。もっとも、定点観測することでしか見えてこない新しい発見もあり、歴史的アプローチが、哲学的洞察や現代的意義を得ることを完全に排除することもないはずである。ただ、それを本来の目的としないのである。

### 1-3. ライプニッツの哲学研究の困難

ライプニッツ研究を難しくしている一因として、ライプニッツの業績のうち、哲学はほんの一部でしかないということがある。ライプニッツには体系的著作がなく（『モナドロジー』など、あっても要約的）、関心も多岐に渡るため、体系的著作があるデカルトやカントなどと比べると、その研究はテキスト・クリティークになりづらい。哲学上の重要な学説

---

<sup>9</sup> *Ibid.*, p. xvi.

<sup>10</sup> G. W. Leibniz, *The Labyrinth of the Continuum: Writings on the Continuum Problem, 1672-1886*, Translated and with an introduction by Richard T. W. Arthur, Yale University Press, 2001.; Philip Beeley, *Kontinuität und Mechanismus: zur Philosophie des jungen Leibniz in ihren ideengeschichtlichen Kontext*, Franz Steiner Verlag, 1996.

の動機が、まったく他の分野における仕事に隠されている可能性もある。もっとも、ライプニッツのこうした万能性は、ライプニッツ研究者の弱みであるとともに強みにもなりうるものであり、多彩な分野との交流やさらなる研究の進展の可能性を開くものでもある。

#### 1-4. ライプニッツの哲学研究の可能性

たとえば、ライプニッツ研究が歴史研究に移行し、「ライプニッツ・ルネサンス」が落ち着きを見せたとはいえ、未だアカデミー版は未完であり、研究の余地は大いにある。現在、これまでの数学や哲学に関する著作をベースとした研究から、他の分野に関する遺稿や書簡の研究が進展し、ライプニッツ像が更新されている。とりわけ、アカデミー版の「自然科学的・医学的・技術的著作」の系列の編纂とともに、ライプニッツの生命の哲学に関する研究（ドゥシュノー、ジャスティン・スミスら）が進展中である。他方で、情報理論的解釈や神経科学的解釈など、現代科学との関連性を指摘する解釈もある<sup>11</sup>。

アイデアの宝庫と言われるライプニッツの研究には、現在の視点から生じた学際的な傾向や流行と不可分な側面がある。こうした現代的研究には、新しい観点から、あるいは別の枠組みの下で、ライプニッツの言いたいことがより見えてくるという利点があろう。他方で、そうした現代的研究には、その問題を現代の目から考察することによって、当の哲学者本人がカバーしようとしていた領域の、一部だけを都合良く切り取ってしまう危険性が常につきまとう。

近年のライプニッツ研究は、そうしたアナクロニズムの問題を意識してか、神学的意義を強調した伝記や研究書も活発に出ている<sup>12</sup>。また、歴史学で見られる、テキスト解釈からプラクティスやモノへの関心のシフトも見られる。たとえば博物館や庭園の観点からライプニッツの哲学を捉え直すブレーデ坎プの著作を見ると、ライプニッツはそうした活動の一環のなかでモナドロジーを構想したのだ、と納得してしまうところがある<sup>13</sup>。

いずれの方向に向かうのかは、哲学史研究者がもつ自由であり、またジレンマでもある。ここでは、個々人の哲学史研究は、いずれかのアプローチに偏った研究となってしまうかもしれない。二兎を追うよりは、どちらかに徹底した方が生産的、という見方もあろう。しかし、それだけでは真理は二極化してしまう。研究全体として、あるいは業界全体として、バランスをとることが大事になってくるように思われる。

## 2. ライプニッツ研究の方法

ライプニッツの哲学は、同時代の哲学者たちとのやりとりのなかで変化していく一方で、

<sup>11</sup> 内井惣七『ライプニッツの情報物理学—実体と現象をコードでつなぐ』中央公論新社、2016年。

<sup>12</sup> Maria Rosa Antognazza, *Leibniz: An Intellectual Bibliography*, Cambridge University Press, 2011.; 町田一『初期ライプニッツにおける信仰と理性—『カトリック論証』注解—』知泉書館、2015年。

<sup>13</sup> ホルスト・ブレーデ坎プ、『モナドの窓』、原研二訳、産業図書、2010年；同『ライプニッツと造園革命—ヘレンハウゼン、ヴェルサイユと葉っぱの哲学』、原研二訳、産業図書、2014年。

それ特有の一貫性を併せ持っている。その哲学を理解するためには、同時代の哲学者たちの議論だけでなく、過去から現代までの膨大なコンテキストを理解する必要がある。ライプニッツと同様に、多岐の分野にわたって研究し、「アメリカのライプニッツ」とも呼ばれた、C.S. パースの研究者であるドヴァールは、パース哲学の全体を論じるにあたり、次の3つのアプローチがありうる、とする<sup>14</sup>。それぞれの暫定的な利点と問題点も補っておく。

①**時系列的アプローチ**……哲学ないし他の問題を研究した思想の発展過程を時系列的に論じて、その哲学者が達した重要な段階を注意深く追跡する方法。

【利点】 哲学的立場を変えざるを得なかった外的要因ないし内的理由を示すことによって、なぜそうしたのかをよりよく理解できる。

【問題点】 哲学者が多様な領域で活躍すればするほど、複雑な話になりがち。また、同時代の学問の主流に対する深い理解が必要となる。歴史的コンテキストに話が終始して、現代的意義や哲学的考察が見失われがち。

②**ベストヒット的アプローチ**……一定の問題、たとえば最も創造的で影響の大きかった問題に焦点を当てる方法。

【利点】 テーマ型の研究として、過去の思想や現代の哲学・科学と接続・比較がしやすい。また、その問題に関心がある他の研究者の関心を得やすい。

【問題点】 哲学者の体系性を示すことができない。そのとき注目されている問題など流行に流されたり、現代との文脈に引きつけて歴史的コンテキストを無視したり、その哲学者自身の考えを誤って解釈し、アナクロニズムに陥りがち。

③**体系的アプローチ**……哲学者の体系性に焦点を当て、その枠組みの中での達成を論じる。

【利点】 哲学者が、学問分類のなかにどのように哲学を位置づけていたかを軸に、哲学的活動の順序づけられた分類を含む学問分類をひとつ選んで、その周囲の研究について議論を積み重ねれば、全体の視野を失わずにかなり詳細な横道にそれることもできる。

【欠点】 全体的な視野をもてるほどに、その哲学者の活動についての全体的な知識をもつことが不可欠である。また、対象となる哲学が、体系的哲学であることが前提にある。

なお、これら3つのアプローチに準ずるものとして、④**ヴィジョン的アプローチ**がある。これは、時系列的な発展を描くのではなく、また、体系的な哲学を描くのではなく、あるテーマを選んでそれに関連する様々なテキストに現れる断片的な思想を結合し、それらを全体的に再構成することで、その哲学者の「ヴィジョン」を示そうとする方法で、ベラヴ

---

<sup>14</sup> コーネリス・ドヴァール『パースの哲学について本当のことを知りたい人のために』大沢秀介訳、勁草書房、2017年。



アルが『ライプニッツのデカルト批判』で採った方法である<sup>15</sup>。

これらの中で、ドヴァールが採用した③体系的アプローチは、「最終的な体系」の問題があるとはいえ、多様な分野で活躍したライプニッツにおいても見込みのある方法である。しかし、これらのアプローチは必ずしも排他的ではない。どのアプローチが最適かは、扱いたい哲学者や問題に相対的であり、哲学史研究者のバランス感覚や先見性、柔軟性が問われる。しかし、哲学史という学問の性格上、「唯一最善の方法がある」ということもないだろう。同一の哲学者について、異なる視点から多様なアプローチによって照らしていくことも、哲学史の豊かさにつながる。哲学史が哲学と歴史の双方を志向する以上、両者は本来相補的であるべきなのである。ある研究が哲学的意義に偏って、歴史的意義について見誤っている場合、それは歴史的アプローチで修正されるべきであろうし、他方で、歴史的意義に偏って、哲学的意義を見失ってしまっている場合、それは哲学的アプローチで補われるべきなのである。

### 3. 私自身のライプニッツ研究

次に、私自身のテーマと、方法を反省したい。私の研究テーマは一貫して、「連続体の迷宮」をめぐるものである。その関連で、無限小やモナドの概念などについて論文を書いてきた。その意味では、先の②ベストヒット的アプローチに該当しよう。近年は、自身のこれまでの研究を反省し、より①時系列的アプローチを踏まえた研究を心がけている。また、このテーマに関連して、数理哲学史のアプローチを模索している（次節）。

「連続体の迷宮」とは、連続的なものの本性と、その生成をめぐる原理的困難を言う。それは、古くて新しい問題である。古くは、「ゼノンのパラドクス」に起源を有し、17世紀にはこのパラドクスは、「瞬間からいかに持続が合成されるのか」という物体の連続運動をめぐる運動論の文脈で現れる。またそれは、幾何学的には「点からいかにして線などの連続体を合成しうるのか」という問題、自然学的には「原子や粒子からいかにして延長的物体が合成されうるのか」という問題でもある。ライプニッツは『弁神論』で、フロワモン（注）の書に言及しつつ、この問題を「自由の迷宮」と並ぶ、自らの哲学の最大の課題とする<sup>16</sup>。したがって、「連続体の迷宮」は、ライプニッツの主要問題であり、その点では関連する他の諸問題とも結びつき、体系的な研究にもつながりうるものである。ライプニッツはこの問題との格闘の中で、自身の哲学を形成していったのであり、「モナドロジー」はその最終的な解決として見ることができる。すでにこうした認識は、ラッセルの時点でも持たれていたものだが、発展史的研究の中で、ライプニッツが独創的な考察を異なる時期ごとに示していることが判明した。このことは、歴史的アプローチが現代的意義と無関係ではない

<sup>15</sup> Yvon Belaval, *Leibniz, critique de Descartes*, Gallimard, 1960. (イヴォン・ベラヴァール『ライプニッツのデカルト批判』岡部英男、伊豆藏好美訳、法政大学出版局、上：2011年、下：2015年)

<sup>16</sup> G.W. Leibniz, *Essais de Théodicée, Discours*, §24, Garnier-Flammarion, 1969.

ことを示していよう。たとえば、アーサーによる前期ライプニッツの連続体の迷宮に関する翻訳と研究は、現代の観点から見ても連続体の本性に関する鋭い洞察を含んでいる<sup>17</sup>。

連続体の問題について、日本で最初の包括的研究を提示したのは沢口昭聿の『連続体の数理哲学』であろう<sup>18</sup>。その第一章で、前期ライプニッツの著作、『抽象的運動論』および『パキディウスからフィラレトゥスへ』がもつ先見性と独創性にいち早く気づき紹介したのも、沢口である。沢口が述べるように、連続体の哲学的な課題の中心は、一方で、「ゼノンの逆理の論理学的原因探求」にある<sup>19</sup>。沢口は、当時の論理学や数学を踏まえてこの課題に取り組んだ。しかし他方で、連続体の問題に取り組むためには、近年の科学における空間知覚・時間知覚や概念形成に関する経験的探求もまた、参照されねばならない。そのことは、連続体の本性からして明らかである。連続体は、一方で数学や物理学などの理論において高度に抽象的な仕方で定義される理念的対象であるが、それと同時に、われわれが日常経験において直接的に意識に与えられる具体的な知覚現象でもあるからである。

連続体の迷宮は、数学的には、点集合と延長の概念の間の衝突である。集合論の整備で連続体の問題が完全に解決されたわけではなく、数学においても、むしろさらなる探求が進んでいる。しかし、連続体の迷宮は、より普遍的・一般的な観点からは、感覚として与えられる連続的な延長的事物の心的表象と、知性が概念として与える非連続的な点や数などの心的表象を、どのように調和させるのかという問題である。すなわち、沢口が言うように、「連続体の迷宮は、哲学の方向からは、感性和理性の関係という古来の大問題とほとんど同一の課題である」<sup>20</sup>。したがって、連続体の迷宮は、想像力の問題であり、概念と知覚との関係、心と世界との関係に関する、包括的な問題なのである。

しかし、ここに真の困難があろう。このような包括的問題は、細分化された現代の諸科学にはおよそ不向きであり、それを扱う包括的理論はまだ存在しない。それに、この難問に向かうためには、数学的・科学的探求だけでは十分でないだろう。そこには哲学史的探求の意義も何かしらあろう。ライプニッツを軸として、これまでに哲学者たちがこの難問にどのように立ち向かったかについての哲学史を描き、現代と歴史の双方を批判的に考察することから何らかの洞察を得ることが、私の哲学的課題である。もっとも、哲学史における歴史学的厳密性の浸透により、このような形での系譜学的研究は、かなり厳しくなったという悲観がある。このテーマで、すべてを網羅する通時的研究を行うことは不可能に近いが、それでも、少なくともある論争史を哲学的観点から批判的に描くことによって、現在との連続性は保てるのではないか、という希望もある。

#### 4. 数理哲学史のアプローチ

---

<sup>17</sup> Leibniz(2001).

<sup>18</sup> 沢口昭聿『連続体の数理哲学』東海大学出版会、1977年。

<sup>19</sup> 沢口昭聿「連続体の哲学的課題」『科学基礎論研究』Vol. 10, No. 4, 175-178.

<sup>20</sup> 同、175頁。

「連続体の迷宮」のような数学と哲学にまたがる問題に対して、哲学史研究がもちうるオリジナルなアプローチとして私が考えているのが、「数理哲学史」である。もっとも、「数理哲学史」という何か特別な分野が確固たるものとして現在あるわけではない。数理哲学史は単純に、歴史的背景を踏まえつつ、数学と哲学の相互影響関係について考察する手法である。その意味では、一般の哲学史からは縁遠い、マイナーな領域を扱う。他方で、西洋の哲学において、数学は哲学の王道のトピックとしてもあったのであり、その意味では、本流への再注目という役割を果たしうるものである。古代より、数学と哲学とは密接な紐帯で結ばれてきたのであり、そのことは、偉大な数学者-哲学者において見事に例証されてきた（プラトン、デカルト、スピノザ、ライプニッツ、カント、パース、フレーゲ、フッサール、ウィトゲンシュタイン、etc.）。また、レオン・ブランシュヴィク以降、フランスのエピステモロジーには、数学の自律的発展のうちに歴史性を読み解く、数理哲学史研究の伝統があった（カヴァイエス、ロトマン、ピエール・ブトルー、ゴンゼト、ヴィユマン、グランジェ、ドサンティ、シナサーら）。

しかし、一般には、数学者が哲学に対して、逆に、哲学者が数学に対して無関心な態度をとる場合が多いのが実情であろう。今日、数学は自律性をもった科学であり、哲学やその他の諸科学からは独立な、純粹に形式的な学問である。哲学もまた、数学の知識や技法を前提せずに扱うるテーマが数多くある。数学史と哲学史もまた、分野間の緊密な交流があるわけではなく、大きく乖離しているのが現状である。日本では、数理哲学史研究が活況を呈しているとは言い難く、むしろ一時期と比べ、大きく衰退してしまった印象がある。しかし、欧米では、数学の哲学や歴史の研究は今でも活況であり、専門家同士の交流も盛んである。数学と哲学、両分野の発展にとって、ひいては学問そのものの発展にとって、互いの交流が不可欠であるならば、数学と哲学の関係を研究する分野もまた、不可欠である。この分野が数学の哲学、および、数理哲学史である。後者は、数学と哲学が関わる諸概念の歴史性により注目する。この分野が生産的・建設的であるためには、数理哲学史の研究や著作は、一方で、数学に心を寄せるものには哲学的関心を、他方で、哲学に心を寄せるものには数学的関心を喚起させるようにして、描かれる必要があろう。

たとえば、私の場合、「抽象の問題」をテーマとして、デカルトやライプニッツをはじめとした、初期近代における数学的実践と哲学の諸理論を踏まえつつ、数学と哲学の影響関係を研究している。抽象の問題とは、「抽象はいかにして可能か」<sup>21</sup>、つまり、世界の具体的対象からいかにして抽象的概念を形成しうるのか、また逆に、抽象から具体はいかにして再現可能なのかという伝統的問題である。そこには、学問分類における抽象の問題や、抽象的存在をめぐる形而上学、抽象概念の形成をめぐる認識論、そして、数学的実践における抽象が関わる。したがって、抽象の問題は、数学と哲学の相互関係を解明するための核心的な主題である。具体的には、数学では延長や空間、虚数や無限など、個々の数学的存在をめぐる議論を扱うとともに、哲学では数学の学問における位置付けや数学的存在の

---

<sup>21</sup> Jean Laporte, *Le problème de l'abstraction*, Presses Universitaires de France, 1940, p. 4.

認識論的・形而上学的位置付けを問うことで、数学と哲学の関係を明らかにすることを目指している。そこには、数学の学問上の位置付け、普遍数学思想の展開、抽象一般概念の形成に関する議論（近代普遍論争）なども、関連する研究課題としてある。

数理哲学史のアプローチの利点は、とりわけ、数学の技術的發展を主に描く数学史の中では語られない、哲学者の数学観に注目することを可能にすることである。明証的な知を与える基礎学問として数学が考えられたデカルト以降の近世哲学の發展は、数学と不可分な関係にあったのであり、その中には数学的業績として数学史には残らずとも、哲学的には大きな影響をもった考えなどもあろう。私の考える「数理哲学史」では、そうした数学と哲学の関係から生成される思想を浮かび上がらせることを目標としている。

ここで考察したいのが、では数学史は、数理哲学史の参照を必要とするのか、という問題である。仮に数学史の研究が、あくまで数学内部の自律的な發展にどれだけ寄与したかという観点からなされるものであるとすると、数理哲学史への参照の必要性は、数学と哲学とが不可分であったような時代や哲学者に限定されてしまうであろう。数学史の関心の中心が、定理の発見に至る過程や証明・作図などの当時の数学的実践にあることは疑いない。しかし、数学史は単なる史料の集積や数学的事実に関する歴史的関心にとどまるものでもない。新しい定理を発見するという仕方でも数学の發展そのものには寄与してなくても、数学者と論争したり、代替的理論を提示している哲学者にも関心を示すようなことは大いにありうる（たとえば、無限小概念の歴史における、ホッブズやバークリなど<sup>22</sup>）。

少なくとも 20 世紀以降にならないと、数学と哲学の境界がそれほどきっぱりとしたものであるとは言いがたく、「数学の自律性」というのも、かなり現代的な認識にはほかならない。たとえば、*Mathematica* という用語は、16 世紀西欧では「数学的諸学」を指し、「自由七科」の後半の四科、幾何学・算術・天文学・音楽を総括する概念として使われていた。17 世紀には、幾何学や算術の純粋数学と混合数学が区別され、混合数学の方に天文学や音楽とともに、光学や機械学なども入ってくる<sup>23</sup>。確実性と有用性をもつ学問という数学の近代的意味が確立するのは、クラヴィウス以降のことであり、ガリレオやデカルトらが登場する 17 世紀の科学革命においてである。数学と哲学が専門分野として大きく乖離した 20 世紀以降、両者の関係を問うためには、両分野で相当な専門的知見をもっていなければならず、両者の交流はいつそう厳しくなるであろうが、それまでの大部分の数学の歴史は、哲学と交流をもっていたのである。

そうした中で、ある時代の哲学理論を踏まえつつ数学との関係を考察する数理哲学史は、独自の研究分野としての意義を十分持ちうるものである。それでも、マイナーな領域であることには変わらず、数学史家に限らず哲学者や数学者にとっても、数理哲学史は限定的

---

<sup>22</sup> アミーア・アレクサンダー『無限小 世界を変えた数学の危険思想』足立恒雄訳、岩波書店、2015 年。; Douglas M Jesseph, *Berkeley's Philosophy of Mathematics*, Chicago University Press, 1993; D. M. Jesseph, *Squaring the Circle: The War Between Hobbes and Wallis*, Chicago University Press, 1999.

<sup>23</sup> Rudolphus Goelenius, *Lexicon Philosophicum*, 1613.; Johannes Micraelius, *Lexicon Philosophicum*, 1661. ミクラエリウスはさらに測地学を混合数学に加えている。

な関心しか得られないことが予想される。どうしてこのような公理が採用されたのかなど、哲学史的コンテクストを踏まえなければ見えないこともあるはずだが、数学・哲学・歴史という複数のディシプリンにまたがることで、研究者の参入を困難にしていることは否めない。この問題に明確な答えはないが、高度なところでのバランス感覚が必要であろう。ただ、数学史家や哲学者、数学者が持つであろう限定的な関心は、哲学と数学そして歴史にまたがる、普遍的な関心になるだろう。私としては、そうした結節点を描き、それに一定の関心を持ってもらえれば、目下の目標としては十分な気がする。

参考までに、近藤洋逸は、『数学思想史序説』の第一章冒頭で、数学史の方法について次のように述べている。

「数学史はたんに史料の集成にとどまるものではなく、数学がいかに発生し発展したか、くわしく言えばそれが社会の基礎である所謂社会の経済的構造、この基礎のうゑにきずきあげられているイデオロギー、とくに哲学＝世界観、また社会の経済的構造の核心をなしている生産力の骨格たる技術、これにもとづく自然科学、とりわけ力学物理学などとの緊密な関連のなかで、それぞれ歴史的時期にどのように生長し発達したか、その発展の形式はどうであるか等々を考察の対象とすべきであろう」<sup>24</sup>

「これまでの考察から我々は数学史探求のための最小限の基準をひき出すことができる。すなわち社会の経済的構造及びこれにもとづく技術に終極的には土台づけられながら、そして自然科学や哲学との交互作用をいとなみつつ、自然の量的側面を認識してゆくプロセス、これが数学の発展である。その対象は何よりも技術と自然科学とを通じて提供され、その方法はそれが探求する対象の性質と、すでに伝承され蓄積されてきた数学の遺産と、さらに哲学——もちろんこれの地盤は究極的には生産関係である——との交互作用のなかで打ち出される」<sup>25</sup>（傍点強調発表者）

近藤は、哲学科出身の数学史家・数理哲学者であり、その哲学に対するシンパシーを考慮する必要があるが、数学史においても、哲学との交流関係を重視する観点は、現在でも重要であるように思う。他方で、数学史家が、数理哲学や哲学史に対してあまり好意的でない印象がある。その一因には、数学史で前提とされる素養の欠如や、哲学史研究の歴史部分の脆弱性にあらうと推測する。分野間の溝を埋め、数学史と哲学史の対話を可能にするためには、より歴史学的手法を取り入れるしかないとも考える。しかし、そうなるに数理哲学史も歴史学となって、消えてしまうかもしれない。そういう可能性のなかで、数理哲学史の哲学的意義をどのように見いだしていけばよいのかが、今後の課題である。

<sup>24</sup> 近藤洋逸『数学思想史序説』岩波書店、1947年（『近藤洋逸数学史著作集 第2巻数学思想史序説』岩波書店、1994年、6頁）。

<sup>25</sup> 同24頁。

## 結びに代えて

歴史学の観点から語られる哲学史は、歴史的な厳密性に基づき、当時の事細かな事情を解明してくれる資料として、一方では重宝されよう。他方で、現在ともつながる問題意識から切断されてしまうと、哲学的動機が失われる危険性がある。しかし、哲学という普遍的動機をもつ分野のために哲学史を研究するのであれば、それは現在の諸問題から切断するような歴史学にはなりえないだろう。また、歴史学が哲学の歴史から何か普遍的な意義を見出そうとするかぎりは、現代的な問題意識との連続性を何らかの形で取り入れざるをえなくなるはずである。したがって、理想は、哲学と歴史の両者を接続する研究である。

もっとも、現実問題として、現代の哲学の関心領域の縮小化と、歴史研究による局所化が押し進めば、哲学と歴史、双方を志向する哲学史という学問の本性上、哲学史自身もそうした動きの中で引き裂かれ、縮小化・局所化の傾向は避けられないであろう。哲学史における、数理哲学史からの乖離現象は、現代における学問の流行や、専門分化の傾向を反映しているところがいくらかあろう。数学に限らず、現代の学問の専門分化の傾向に引きずられて、哲学史が扱う領域がどんどん限定されていくことも予測される。今では、生物学の哲学や情報科学の哲学、認知科学の哲学など、諸科学の哲学があるが、専門性が一層高まり、哲学や哲学史のバックグラウンドがおよそ役に立たないようなことになれば、そういった領域も哲学史からは縁遠くなり、科学史のテリトリーとなって、哲学史が扱う領域を狭めることになる。こうした意味では、哲学史がもつ哲学業界外部に対する普遍的意義について、悲観的にならざるをえない。

しかしながら、哲学的関心と歴史的事実をつなぐ唯一の分野が哲学史である以上、セラーズがカントの言葉をもじって述べた、「哲学史は哲学者たちの間で行われるコミュニケーションを可能にする共通語 (lingua franca) である。哲学史なき哲学は、空虚や盲目ではないにしても、唾である」にならい、「哲学史は哲学者と歴史家の間で行われるコミュニケーションを可能にする共通語である」と言うことができよう<sup>26</sup>。アナクロニズムの危険性を認識しつつも、ある問題について、通時的な思想の変遷を描くこと、あるいは少なくとも何らかの連続性を見いだすこともまた、われわれが現在を生きる人間である以上、学問として不可欠なことであろう。<sup>27</sup>

---

<sup>26</sup> Wilfrid Sellars, *Science and Metaphysics: Variations on Kantian Themes*, 1967, Ridgeview Publishing Company, 1992, p.1.

<sup>27</sup> 本研究は、科研費・基盤研究(C)、課題番号 JP16K02113、「抽象の問題を軸とした初期近代における数学と哲学の相互交流に関する数理哲学史的研究」の助成を受けたものである。最後に、本発表は、オーガナイザーの植村氏、並びに稲岡氏・坂本氏らとの議論なしには実現しえなかったものである。

2018.05.20

## 色彩と逆光：数理哲学者としてのライプニッツ・オルタナティブ

稲岡 大志<sup>†</sup>

哲学の歴史のアイデンティティに関するだらだら続く議論は面白いものではないし実りのあるものでもないと思う。（こうした議論は、内的理由というよりは制度的理由で続けられることが多い）（Vermeir [2013 p.65]）

例えばライプニッツのパリの二百年を記念してという、ドイツとフランスの共同主催の学会が二年前にあったんです。フランスの大学院の二、三人の人が IBM の機械を使って、ライプニッツの言葉のシュブスタンスとか、レアリアの頻度を計算して分析したりするような、ほんとうに考えられないような注釈学をしていました。（山本・石黒・坂井 [1978 p.17] における石黒の発言）

0

本提題は 2017 年度日本哲学会大会シンポジウム「哲学史研究の哲学的意義はなにか？」の成果を承けたかたちで、議論の焦点を個々の哲学者に絞る後続のプロジェクトの一環として企画された本ワークショップにて発表されるものである。そのシンポジウムで、提題者の一人である植村は、哲学史研究の方法論として、歴史的アプローチと哲学的アプローチに次ぐ第三のアプローチである、「歴史的・規範的アプローチ」を提案している（植村 [2017]）。植村はこのアプローチが哲学的意義のある哲学史研究の唯一のモデルではないと断っているが、提題者は、それに加えて、「ひとつの研究プロジェクトないし研究潮流を、牽引するないし動機付ける可能性のあるテーゼの提出」という哲学史研究の方法論を提案したい（以下では「プロジェクト提案アプローチ」と呼ぶ）。提題者がこのアプローチを提案する動機の一つとして、哲学史研究の哲学的意義を問う単位を論文や単著単位に限定せず、「時代や問題関心を緩やかに共有する複数の研究」もまた評価単位とすべきことを強調したいという点がある。このアプローチは、細分化が進み、個々の論文単位ではその哲学的意義がますます想像しにくくなる哲学史研究の現状を踏まえた上で、哲学史研究の実践により即した仕方での哲学的意義を評価するフレームワークを提供することに貢献できる（こうした評価手法を、個別の研究の集まりをひとつとみなして評価することを踏まえて、以下では「集合式評価」と呼ぶ）。

本提題では、プロジェクト提案アプローチと集合式評価の概略を示し（1 節）、集合式評価のモデルとして「モノドロジー・モデル」を提案する（2 節）。そのうえで、プロジェクト提案アプローチとモノドロジー・モデルに説得力を与えるケースとしてライプニッツ研究を取り上げる（3 節）。その上で、歴史学からの哲学史研究に対する批判的視点にも答えたい（4 節）。

### 1 哲学的意義のある哲学史研究のモデルとしてのプロジェクト提案アプローチ

ヴェルメイユは、哲学史の方法論として、現在の関心から過去の哲学者の資料を読む「贗作者（appropriationist）」と当時の文脈に置いて読む「文脈主義者（contextualist）」を対比させた上で、

<sup>†</sup>神戸大学大学院人文学研究科 <mailto:hinaoka@lit.kobe-u.ac.jp>

著者の意図を探るかどうか、アナクロニズムかどうか、という点では両者は区別できず、両者ともに過去の資料を現在に再創造 (re-create) させているとして、両者に対比させるかたちで、とりわけ哲学に関連を持つ哲学史研究として特定の概念や理論の系譜を構成する「系譜学 (genealogy)」を、哲学にとって意味のある哲学史研究のモデルとして提案する (Vermeir [2013])。

系譜学アプローチの背景には、過去の哲学と現在の哲学にギャップはなく、現在は過去の一部であるという前提がある。この前提を敷衍するかたちで、ヴェルメイユは、テイラーの「歴史的説明は、いまの理論、概念、問題に新しい光を当て、ひょっとするとオルタナティブを示すかもしれない」(Taylor [1984]) を引いて、現在特定の哲学的問題に取り組んでいる哲学者が、関連する概念や理論の系譜学を知ること、現在馴染みのある概念がいかなる歴史的経緯で形成されたのか、過去において異質に見えていた概念や理論がいかにして現在の理解可能なものに解釈されていったのか、を知ることができ、「今日ただちに利用可能であるとは限らないオルタナティブはなにか」を知ることができるとする (Vermeir [2013 p.65])。このことは、歴史において「失われた選択肢 (lost option)」が重要ではないことは意味しない、むしろ、それは現在用いられている概念や理論を見直すことになることをヴェルメイユは強調する。

ヴェルメイユが系譜学アプローチの具体例としてあげているのは、「客観性」概念に関する歴史研究やジョナサン・イスラエルの啓蒙主義に関する系譜学的研究であり、狭義の哲学史研究ではない。しかし、過去と現在の哲学に断絶を認めず、現在の研究上の関心に基づいて系譜学を描き、現在の哲学を見直す、場合によっては、有用なオルタナティブを提示する、というアプローチは、哲学的意義を持つ哲学史研究のモデルとして検討に値するものと思われる。本提題では、ヴェルメイユの系譜学アプローチが含み持つ要素のうち、現在の哲学研究で用いられている理論や概念に見直しを与えるという点、現在の哲学研究にオルタナティブをもたらすという点の后者に力点を置いた上で、「過去の系譜学を描くことで、現在の哲学研究に作業仮説や方向性を提示する」という「プロジェクト提案アプローチ」を提案したい。

このアプローチの概略は、(1) ある哲学者のテキストからその哲学者に帰属可能な主張ないし特定の問題に関する (検証を欠いているという意味での) 仮説を構成する。(2) その主張を哲学的主張として捉え、その妥当性 (真か偽か) や関連性 (どの程度独自性があるか、関連する研究はどれくらいあるか、哲学的問題としての重要性はどれくらいか、など) を評価する。(3-1) 独自性がそれほど高くはない、つまり、以降の哲学史でその主張の検討がある程度行われていることが判明したならば、その主張の先駆性が認められたことになる (ただし哲学的意義は弱いかもしれない)。(3-2) 独自性や探求価値が高く、その主張の検討も十分になされているとは言えない場合、その主張は一つの研究プロジェクトを推進する動機づけを持つとみなすことができる<sup>1</sup>。

さて、実は、こうしたアプローチは、哲学史研究者にとってだけでなく、非哲学史的な哲学研究を行っている哲学者にも馴染みのあるものである。というよりも、哲学に限らず、学術論文の構成として、論文の主題に関する先行研究を調査し、自説に入る前にサーベイを提示することはごくオーソドックスなものである。先行研究の対象となる論文や著書の選択や評価の基準は当然論文の著者自身の問題関心に基づくものである。そして、著者は、先行研究の整理から、未解決問題や不十分にしか議論されていない問題や誤った方向に向かっている問題、ある問題に対するさまざまな立場とその良し悪しなどを提示し、論文で扱う論点を絞った上で、自説による貢献を図る。こうした先行研究のサーベイは、単に学術論文というジャンルの書き物において慣習として取り込まれているわけではなく、問題関心の正当性や自説の独自性や研究史における位置づけなどをはっきりさせて、学術的な貢献をなすことにつながっている。そして、提題者の見立てでは、先行研究のサーベイとして論文の著者が行っている作業は、上述のプロジェクト提案アプローチのもと

<sup>1</sup> このアプローチは、上述のシンポジウムで松田が提示した「地固め」「助走」としての哲学史研究と重なる部分がある (松田 [2017])、納富が提示した「複眼的哲学史」(納富 [2017]) の「複眼さ」を現代の文脈を考慮に入れたものとして解すれば共鳴する部分がある。また、植村の歴史的・規範的アプローチとも、現代の哲学の議論の相対化をもたらすという点で重なるところがある (植村 [2017])。したがって、この方法論の独自性はそう強いものではない。



での哲学史研究者の作業と、実質的には変わらない。ただし、哲学史研究の場合、個別の論文における先行研究サーベイのように、サーベイ作業を行なう者と独自の研究を行なう者が同一である、というわけではない。むしろ、複数の著者がそれぞれの関心に基づき論文を作成した結果、それらがある哲学研究のプロジェクトの先行研究の一部を成すということが結果として起こっている、と言うべきである。ある論文の先行研究サーベイに含まれる個別の論文は、自分がどういった研究の先行研究となるか、を知った上で作成されているわけではない。論文の位置付け、あくまでもそれを先行研究として捉える別の研究者の関心に基づくのである。哲学史研究がやっていることの一つは、過去の哲学者の著作の検討を通して、特定の問題関心から系譜学を描くことにある。そうして描かれた系譜学が、現在の哲学研究にはない、あるいは乏しい方向性や作業仮説を提示することに繋がるとき、哲学的意義を持つと言えるだろう。すなわち、単純化して述べれば、哲学史研究とは、ある哲学研究のプロジェクトの先行研究のサーベイ（の一部）なのである<sup>2</sup>。

## 2 哲学史研究の哲学的意義の評価モデルとしてのモノドロジー・モデル

前節で概略を提示したプロジェクト提案アプローチは、先行研究サーベイとしての哲学史研究という観点を含むものである。この観点のもとでは、哲学的意義を問う哲学史研究の単位を個別の論文や著書に限定する必要はない。むしろ、実際の学術論文の先行研究サーベイの対象は、通常は、一つの主題につながる複数の研究のまとまりであるだろう。そして、オリジナリティや説得性といった論文の学術的価値は、サーベイ対象の先行研究に含まれる個々の論文一つ一つに対してではなく、先行研究というひとつのまとまりを考慮した上で評価される（もちろん、サーベイ自体の適切さもまた論文の評価の対象である）。したがって、先行研究サーベイとしての哲学史研究の哲学的意義は、「ある主題のもとで一つものみとみなされる複数の研究」に対して評価されるべきである<sup>3</sup>。

現在、哲学史研究は細分化が著しく、論文単体ではその哲学的意義は容易には想像することが難しい。しかし、そうした研究もまた、別の哲学研究ないし哲学史研究の先行研究となる可能性を持っている。実際にある哲学ないし哲学史研究の論文の先行研究にそうした論文が言及・参照されたならば、その論文は、当該論文に対して何かしらの貢献をしている。具体的にどのような貢献か、は、サーベイの中でどう位置づけられるか（問題意識の起源か、概念の明晰化か、方向性の提示化か、など）に依っている。

さらに、前節でも述べたように、プロジェクト提案アプローチ+集合式評価は、実際に作成された哲学論文の先行研究サーベイにとどまらず（むしろこの例はこのモデルを理解しやすくするためのものでしかない）、仮想的に捉えられたひとつの研究プロジェクトにも適用することができる<sup>4</sup>。

以上の集合式評価のモデルとして、本提題はモノドロジー・モデルを提案する<sup>5</sup>。常に最新の研究にアップデートされる複数の哲学史研究がまとまって一つの哲学的意義を持ちうるという集合式評価のアイデアは、一つのものとしての有機体が、構成要素というレベルでは生成と消滅を繰り返しながらも、同一性を持つ一つのもののみであるという様子を思わせる。集合式評価のも

<sup>2</sup>ここでの「プロジェクト」とは、実際に共同研究を行って論文の著者として名前を連ねるタイプのものや、何らかの研究資金のもとで組織されたものに限らない。

<sup>3</sup>哲学的意義の評価単位という問題関心は冒頭で触れたシンポジウムでは見られなかったものである。

<sup>4</sup>プロジェクト提案型アプローチと集合式評価は独立のものであり、哲学史研究の哲学的意義を検討する際、片方を採用するともう片方も採用しなければならない、というわけではない。たとえば、単独の哲学史研究の論文がプロジェクト提案型アプローチとしての意義を強く持つということは十分に有り得る（次節で言及するマンダースによるユークリッド『原論』研究はその一例である）。しかし、本節で述べるように、どの哲学史研究がどの哲学研究プロジェクトの先行研究として位置付けられるか、は、かなりの程度で偶然的要因に依るものであり、したがって、評価のフレームとして集合式評価を採用することには、こうした偶然性を考慮するという理由がある。

<sup>5</sup>モノドロジー・モデルは、哲学史研究を哲学研究における先行研究のサーベイとして捉えることであり、植村 [2017] が引いた Taylor [1984] のアイデアを「系譜学としての哲学史研究」として展開した Vermeir [2013] をさらに展開させたものである。

とである研究を捉えると、ある研究の先行研究として参照される研究群のそれぞれもまた、先行研究群を持つ、という先行研究の入れ子状態が認められる。そして、こうした「部分が入れ替わりつつも全体としては一つであり続ける」「有機体の構成要素もまた有機体として構成されている」という有機体に特有の現象をモデルとしたものがライプニッツのモナドロジーである。したがって、集合式評価のモデルとしてモナドロジーを用いることは汎用性を持つように思える。

この世界の最小の構成要素であるモナドは広がりを持たず、他のモナドとも因果関係を持たない。モナドが集まってさまざまな実体を構成するが、ここでは、モナドの集まりに一性を与えて一つにする「支配的モナド」と、支配的モナドによって一性を与えられる構成要素である「従属的モナド」の二種類があるという点を押さえておきたい（1703年6月20日デ・フォルダー宛書簡, GP.II,252、『モナドロジー』70節, GP.VI,619）。さらに、物体のどの部分にもモナドは多く含まれている（『モナドロジー』66節, GP.VI.618）。各モナドもまた、その内部に支配的モナドと従属的モナドを持つのである。

一般的な学術論文は先行研究サーベイのパートを持つが、モナドロジー・モデルでは、論文と先行研究の関係を支配的モナドと従属的モナドの関係として理解することができる。さらに、一つの主題を探求するものとみなせる複数の研究を、支配的モナドによって一性を与えられる従属的モナドの集まりとして捉えることで、個別研究のその主題への関わり具合をモナド間の支配-従属関係のネットワークにおいて有する位置として可視化することができる<sup>6</sup>。そして、支配-従属関係は、実際に書かれた論文とその先行研究に対してだけでなく、仮想的に一つの主題に関する研究とみなされる複数の研究間にも適用される（むしろモナドロジー・モデルのポイントはこちらにある）。

哲学史研究は哲学にアイデアを与えるという意味で哲学的意義を持つ、と言われることがある。このこと自体は正当であるが、個々の哲学史研究が、どのような哲学研究に、どのようなアイデアを提供したのか、を明示的にするためには、本節で提示したモナドロジー・モデルは有効なモデルの一つである。哲学史を研究することは、ある仮想的な哲学研究のプロジェクト（それはまだ存在していないかもしれない）の先行研究の一つとして、そのプロジェクトにさまざまな仕方でも貢献できる、という意味で哲学的意義を持つのである<sup>7</sup>。

### 3 ライプニッツの幾何学研究の哲学的意義

プロジェクト提案アプローチという哲学的意義を持つ哲学史研究のモデルに説得力を与えるために、ライプニッツの数理哲学（数学の哲学）に関する研究史において、提題者が専門的関心を持っている幾何学研究を取り上げる。この主題はここ十年くらいの研究の進展が目覚ましいが、参与している専門家は世界的に見ても少なく、その意味では無限小解析関連の主題とは異なり、比較的萌芽度が高い領域であり、それゆえにその哲学的意義はまだ十分には明らかにされていないと言いが難い。しかし、提題者の見立てでは、この領域の研究は現代の哲学研究に対して、プロジェクト提案アプローチとしての意義を持つ。このことを指摘することで、上で祖述したプロジェクト提案アプローチ+集合体式評価が他の主題や哲学者についても使える汎用性を持つことを説得的に示すことが本節の大きな目的である。

「位置解析 (analysis situs)」や「幾何学的記号法 (characteristica geometrica)」とも呼ばれるライプニッツの幾何学研究は、パリ時代 (1672-76年) に始まり、最晩年まで継続するもので、ユークリッド幾何学の革新を目指した40年の長期に渡るプロジェクトである。この間ライプニツ

<sup>6</sup>人物や論文の影響関係をノードと有向グラフを用いて表現した図によって可視化されるだろう。

<sup>7</sup>優れた論文は、その先行研究があたかもその論文を生み出すために書かれたような印象を読む者に与えることができるが、もちろん先行研究の論文は時間的に先行するため、そうした意図は持ってはいない。モナド同士は因果関係を持たず、ただ、あるモナドの状態変化と別のモナドの状態変化が対応しているため、因果関係があるかのように見えてしまう。ライプニッツはそれを「予定調和」と呼んだが、ある種の優れた論文を読んだときに私たちが感じるのもこの予定調和に近いだろう。

ツは多くの草稿を書き残すが、生前に出版することはなく、初めて日の目を見たのは19世紀に編纂されたゲルハルトによる数学著作集においてである。こうした資料上の制約はあるものの、数学史においては、ライプニッツの着想は、位相幾何学の萌芽となる着想を含んでいたが、ライプニッツ自身がそれを十分に展開することはなかった、という評価が定着していた。

20世紀始めに起きたライプニッツ・ルネサンスでは、同時代の論理主義の先駆としてライプニッツを位置付ける動きが起きたが、こうした動きの中心にいたルイ・クーチュラは『ライプニッツの論理学』で一章を割いて位置解析を論じている。しかし、本格的な研究は、1980年代に入ってハビエル・エチェベリアによるものが初めてである。ライプニッツの幾何学研究関連の未公刊草稿に関する研究で博士号を取得したエチェベリアは、その後、位置解析の数学史的評価や数学的内容に関する論文を公刊するだけでなく、1995年にマーク・パルマンティエと羅仏対訳集『幾何学的記号法』を刊行するなど、長らくこの分野における主要な研究者であった。エチェベリアは、ライプニッツの幾何学研究は晩年まで続くものの、初期の段階の取り組みがピークであると主張し、これが長らく研究者間でも共有されていた。

こうした状況にパラダイムシフトをもたらしたのが2007年のヴィンツェンツォ・デ・リーシによる『幾何学とモノドロジー：ライプニッツの位置解析と空間の哲学』である（De Risi [2007]）。博士論文がもとになっているこの著作では、デ・リーシは、公刊されている幾何学関連の一次資料だけでなく、ライプニッツ文書館に保管されている草稿も調査し、エチェベリアとは異なり、ライプニッツは最晩年まで熱心に幾何学研究に取り組んでおり、とりわけクラークとの往復書簡の背後に幾何学研究の新しい展開がある、と主張し、カント的超越論的観念論への傾斜をライプニッツに認めている。

この著作の出版以降のライプニッツの幾何学に関する研究は、大きく言えば、(1) 数学史的・哲学史的研究、(2) 幾何学をライプニッツの知的業績全体に位置付ける研究、(3) 現代的意義に関する研究、の3つの傾向に分けることができる（個々の研究がこれら3つのどれかにカテゴライズされる、というのではなく、3つの要素のうち複数を程度の差はあっても含んでいるものもあることに注意）。では、この研究が持つ哲学的意義とはなにか。まず、(2)の成果として、「記号を用いた推論と図形を用いた推論には共通の仕組みがある」という主張がライプニッツに帰属できることが示されている。これは、「図形は推論の道具としては信頼できないので使うべきではない」とライプニッツが考えていたとする解釈を否定するもので、これに連動して(1)の研究も見直す必要が出てくる。ただ、ライプニッツがこの主張自体を展開することはなかった。したがって、ライプニッツ以降の数学史や哲学史においてこの主張は本当に忘却されていたのか、また、この主張のもとでどのような研究が可能か、といった点の考察が求められる。これは、現在の図形推論研究に動機づけを与える。

この事情を少し立ち入って具体的に見ておきたい。以下は『人間知性新論』第4巻1章9節からの引用である。

論証の力というのは、描かれた図形からは独立しています。図形は、言いたいことや注意を向けたいことへの理解を容易にするためのものにすぎません。推論を構成するのは普遍的命題です。つまり、定義と公理と既に論証された定理なのです。しかも、推論に図形がたとえないとしても、それらが推論を支えているのです。そういうわけで、シュベリウルというある学識ある幾何学者は、ユークリッドの図形を、当の図形とそれに付加された論証とを結びつける文字なしに呈示しました。（A.VI,6,360-1）

このテキストは、文字通り読む限りでは、数学的推論を行う上では図形はせいぜいわかりやすくするための道具でしかなく、むしろそれなしでも証明は可能である、とライプニッツが考えていたことを示している。ここから、位置解析のような、図形の大きさや形を考えない幾何学という発想をライプニッツが保持していたという解釈と合わせる仕方で、ライプニッツは図形は推論

の媒体としては不要なものであると考えていた、という解釈が導かれる。実際、こうした解釈は、図形推論研究に従事する哲学者や論理学者によって共有されている見解でもある (Manders [2008 p.77], Avigad et al[2009], Mumma[2010], Pombo[2015])。しかし、提題者による研究では、こうした解釈は誤っている。このテキストは、個別的図形に基づいても一般的図形についての主張を導出することはできない、という、ジョン・ロックの代弁者であるフィラレートの発言を受けたものである。確かにライプニッツはフィラレートの指摘を認め、図形は推論をわかりやすくするための道具でしかないと考えていたように思われる。しかし、幾何学的記号法関連の草稿では、ライプニッツは、図形の持つ性質のうち、長さや大きさといった定量的性質と、交差や接触といった定性的性質をわけたうえで、後者に着目して記号法化することでユークリッド幾何学の革新を試みようとしている。この路線は現代の図形推論の形式化の路線と本質的には変わらない。すなわち、ライプニッツにとっては、図形には推論の媒体としての資格があり、また、位置解析は、図形の形や大きさを捨象する幾何学ではないことが一次資料の読解によって示すことができる (稲岡 [2010, 2018-9])。仮にこの解釈が正当なものであるならば、なぜライプニッツ自身は図形推論研究の方向に進まなかったのか、という疑問が生じるだろう。提題者は、この疑問に対しては、ライプニッツ独自の想像力概念が要因としてあることを指摘した。このことは、ライプニッツの想像力概念を共有しない研究者にとっては、図形は正当な推論の媒体であり、その性質を探るという研究に哲学的興味がない、ということは帰結しない (たとえば、ラブアンは、ライプニッツの想像力概念の検討から、それが現代数学でも意義を失っていないことを指摘する (Rabouin[2017]))。

さて、現在の図形推論研究が登場する背景には、大きく言えば以下の2つがある (詳しくは稲岡 [2014])。まず、1980年代以降のコンピュータの画像処理能力の向上を受けて、さまざまな推論において図形が果たす役割の解明が主に論理学の推論に関して進められた点 (Allein and Barwise[1996])、さらに、ユークリッド『原論』において図形が果たす機能を解明する研究が数学史や哲学において登場した点である (Manders[2008a, 2008b], Netz[1999])。こうした背景のもとで、ユークリッド『原論』での図形を用いた推論の形式化を試みたり (Avigad et al.[2009])、フレーゲの概念記法を図形推論として解釈したり (Macbeth[2010,2012a,2012b,2014])、中間値の定理はグラフを描くだけで証明できるかといった個別証明における図形の役割を解明したり (Azzouni[2013])、数学教育を受けていない被験者に簡単な図形上での推論をさせて、人間が生来的に保持しているであろう図形認知に基づく推論能力を明らかにする、といった研究 (Anderson et al.[2002]) が繰り返されている。

ここから、現在の図形推論研究は、大きく言うと、(4) 幾何図形の推論上の機能を形式化する研究、(5) 数学史や哲学史において図形が本当に推論の不適切な媒体であるとみなされていたのかを批判的に考察する研究、(6) 数学における図形の機能を分析する哲学研究、(7) 図形認知と推論に関する認知科学的研究、に分かれており、こうした研究動向をひとつとみなすことで現在、「数学における図形の機能に関する歴史的・哲学的・論理的・認知科学的研究」というひとつの大きな学際的研究プロジェクトが生まれているとすることができるだろう。過去の数学者や哲学者が図形をどう活用していたか (していなかったか)、数学記号としての図形についてどのような見解を持っていたか、などについての研究はこうした潮流に正当な動機づけをもたらすだけではなく、作業仮説や研究の方向性を提示することもできるだろう。

(実際にプロジェクトとして組織されているわけではないという意味で) 仮想的な図形推論研究プロジェクトは、論理学、哲学、哲学史、数学史、認知科学といった分野から研究者が参与しているが、当然、個別の研究はそうした仮想プロジェクトとは無関係に、独自の問題関心に基づいて進められている。ライプニッツの幾何学研究のさまざまな成果は、たとえば、上述の(5)の研究に対しては、図形推論の系譜学を描くための不可欠な要素として捉えられるし、(6)の研究に対しては、背理法の仮定のような、本来偽である事態を図形を用いて表現する仕方についての考察に関して、「図形のどのような性質が証明の地の文によって捨象されて読むように指示されてい

る複数のパターンがある」といった仮説を提示することができる（稲岡 [2017a, 2017c]）。

#### 4 歴史学研究と哲学史研究

さて、上で述べた(5)のタイプの研究は、過去の哲学者や数学者の書いたものを研究対象としているため、それらの資料を現代の問題関心や概念を持ち込んで読んでいくというアナクロニズムの批判を受ける可能性がある。科学史研究においても同様のアナクロニズム批判への批判はなされているが、ジャーディンは、制度や用語への配慮をした上であれば、現在の問題関心や理論や概念を過去の資料の研究に持ち込むことがただちに「悪しきアナクロニズム (vicious anachronism)」(Jardine [2000])になるわけではないとする。たとえば、ライプニッツの数理哲学に関しても、17世紀には「幾何学」という語は当時の数学と同義で用いられることが多いため、ライプニッツのテキストに登場する「幾何学」が図形を探求する数学分野を指すのか、数学一般を指すのか、注意深くなければならない。また、ライプニッツは位相不変量という概念を持っていないので、位置解析を位相幾何学の萌芽として数学史に位置付けることにも慎重になる必要がある。しかし、そうした注意をする限りでは、つまり、適用する概念のその時代から現在への系譜（の連続と断絶）を意識する限りでは、「悪しきアナクロニズム」というレッテルは免れると思われる。

さらに、トッシュは、歴史的影響関係もまたスキナーのように厳密に捉える必要はなく、過去の著者の意図もまた重視する必要はないとする (Tosh [2003])。たとえば、トッシュ自身の例を借りるならば、「第二次世界大戦はなぜ起きたのか？」という問いを研究する歴史学者は、考察対象を、実際に「第二次世界大戦を起こしてやろう」という意図を持っていた政治家たちに限定する、ということはずまいだろう。むしろ、そうした意図とは関わりなく研究対象を選択したうえで、そのふるまいとその影響を研究するはずである。

ジャーディンやトッシュのアナクロニズム批判への応答は先行研究型哲学史研究にもあてはまる。ライプニッツは図形推論研究を行わなかったし、そうする意図もおそらく持っていなかった。しかし、ライプニッツの資料を検討すると、図形を用いた推論システムと文字を用いた推論システムには共通するものがあるという主張を取り出すことができる。そして、この主張がライプニッツ以前には見られるものであったのか、ライプニッツ以後はどう変遷したのか、あるいは忘却され続けていたのか、をたどることで、現在にはない方向性が発見される余地はある。したがって、現在の図形推論研究の先行研究としてライプニッツを含めることは正当であるし、むしろ必須ですらあるだろう。

この点を敷衍したい。アナクロニズム批判とは、過去の哲学者の資料を読む際、現在の問題関心や概念や理論を持ち込んで読むという方法への批判であった。たとえば、「幾何学」という語が17世紀と現代とでは用いられ方が異なることは十分に注意すべきである。しかし、検討対象の哲学者や著作の選択に現在の関心を反映させることはアナクロニズムではない。仮にそうだとするならば、たとえば、「存在論 (ontologia)」という語のない古代ギリシアの哲学者の存在論を研究することは批判されることになる。実際、通常の学術研究でも、先行研究の対象として、それらの研究の著者が意図していなかった、あるいは、その時代には存在しなかったテーマのもとで、関連する論文が選択されることは珍しいことでない。

特定の哲学者の著作を検討し、そこにある問題関心や仮説を見つけ、その哲学者がそれを展開しなかったとして、なぜそうしなかったのか、できなかったのか、を問うことには哲学的意義がある。もちろん、「なぜこれをしなかったのか」というタイプの問いには、歴史的事実などの偶然的要因が絡んでくるため、解答は容易ではない<sup>8</sup>。しかし、哲学理論の体系内で説明が可能ならば、

<sup>8</sup>たとえば、提題者は、クラークとの往復書簡でライプニッツはそれまでの空間論を一新させる着想を抱いていた可能性があることを指摘したが、ライプニッツがその着想を練り上げなかった理由は、おそらくは哲学的理由ではなく、三ヶ月後に訪れた死である（稲岡 [2017b]）。

つまり、ある前提のもとで理解できるなら、その前提を外した場合、問題や仮説の展開が可能ということが言えるし、それが現在の哲学にプロジェクト提案をすることになる（もちろん、ここまでうまくいくかどうかは保証がない。各研究者による個別の研究の積み重ねとして遂行させるものであり、ある程度研究の厚みが出てきてから評価できることだろう。）<sup>9</sup>。

## 5 おわりに——哲学史研究の色彩と逆光

過去の哲学者に関する研究のうち、極端な歴史的影響論と極端な内在的構造論というスタイルには哲学的意義を期待することは困難であると松田は主張し、両者の間にこそ哲学的意義を持つ哲学史研究は位置付けられるべきとする（松田 [2017 p.24]）。しかし、本提題が提案するプロジェクト提案アプローチ+集合式評価というモデルにおいては、そうした極端なスタイルのもので研究も、なんらかの哲学研究プロジェクトの先行研究になりうるという意味では哲学的意義を欠くとは言えないだろう。いかなるスタイルの哲学史研究であっても、公刊されて以降の哲学研究にどのような色彩をもたらすのか、予測することは難しい。また、過去の哲学者の研究が、現在の哲学研究の概念や問題意識などに逆光を放つことは、たとえ哲学史研究が歴史学化し、そのスタイルを変貌させるとして、起こりえない、と断言することもできないだろう。

※本提題は JSPS 科研費（15K02002）の助成を受けています。

### 文献

ライプニッツのテキストからの引用については、アカデミー版全集は、A、系列、巻数、頁数の順で、ゲルハルト哲学著作集は、GP、巻数、頁数の順で、それぞれ示している。

Allwein. Gerard, Barwise. Jon, ed, *Logical Reasoning with Diagrams*, Oxford Studies In Logic And Computation Series, 1996.

Anderson. Michael, Meyer, Bernd, Olivier. Patrick, ed, *Diagrammatic Representation and Reasoning*, Springer, 2002.

Avigad.Jeremy, Dean.Edward, Mumma.John, "A formal system for Euclid's Elements", *Review of Symbolic Logic*, 2, 2009, pp.700-68.

Azzouni.Jody, "That We See That Some Diagrammatic Proofs Are Perfectly Rigorous", *Philosophia Mathematica*, vol.21,no.3, pp.323-38,2013.

<sup>9</sup>歴史学からみた哲学史研究の問題点として、本節で触れたアナクロニズムの他にも、過去の哲学者が本来扱っていた問題の一部しか哲学史は切り出せていないという点、研究対象が原則としてテキストに限られてきた哲学史研究が、テキストに縛られず、プラクティスの把握に傾斜していく歴史学研究に変わりつつある現状を受けると、今後の歴史学化した哲学史研究は、私たちが哲学科ないしそれに類するコースで専門的訓練を受けた哲学史研究とは異なる学問分野になってしまい、その哲学的意義はますます消失してしまうのではないかとこの点を挙げる事ができる。ここでは後者に関して簡潔に提題者の見解を述べるならば、確かに、ライプニッツ研究が歴史学化の傾向にあるのは世界的に見ても明らかである。よって、歴史学化したライプニッツ数理哲学研究が現代の哲学研究にどう関わるのか、は、改めて問われるべきであることは疑いない。他方、哲学史研究の研究手法の変化は過去にも起きている。たとえば、本稿冒頭の2つ目の引用の石黒による発言は、当時最先端であったであろう、コンピュータを用いた研究手法に対する、おそらく40年前の哲学史ないし哲学研究者の多くに共有された見解であるように思われる。しかし、発言中で語られている研究手法は今となっては珍しいものではないし、そうした手法が導入されたことで個別哲学者に関する研究が持つであろう哲学的意義が低下した、という事実も（おそらくは）ない（具体的な意義の中身や意義のあり方は変わるとしても）。本提題では、個別の哲学史研究者がそれぞれの問題関心に基づいて行った研究が、ある哲学の問題の系譜学を結果的に描いてしまっているという点に哲学的意義を求めたが、あくまでも提題者による楽観にすぎない見解でしかないが、使えるものは使うという哲学のある種の貪欲さや着想が発生する偶然性を考慮するならば、こうした現象は、研究手法が変遷しても、決して消滅するものではないように思われる。

- De Risi. Vincenzo, *Geometry and Monadology : Leibniz's Analysis Situs and Philosophy of Space*, Birkhäuser, 2007.
- Jardine. Nick, "Use and Abuses of Anachronism in the History of the Science', *History of Science*, vol. 38, pp.251-270, 2000.
- Macbeth. Danielle, "Diagrammatic Reasoning in Euclid's Elements", *Philosophical Perspectives on Mathematical Practice, Texts in Philosophy*, vol. 12, ed. Bart Van Kerkhove, Jonas De Vuyst, and Jean Paul Van Bendegem, London: College Publications, 2010, pp.235-67.
- , "Seeing How It Goes: Paper-and-Pencil Reasoning in Mathematical Practice", *Philosophia Mathematica*, 3-20, 2012a, pp.58-85.
- , "Diagrammatic reasoning in Frege's *Begriffsschrift*", *Synthese*, 186, 2012b, pp.289-314.
- , *Realizing Reason: A Narrative of Truth and Knowing*, Oxford University Press, 2014.
- Manders. Kenneth, "Diagram-Based Geometric Practice", Paolo Mancosu, ed, *The Philosophy of Mathematical Practice*, Oxford University Press, 2008a, pp.65-79.
- , "The Euclidean diagram(1995)", Paolo Mancosu, ed, *The Philosophy of Mathematical Practice*, Oxford University Press, 2008b, pp.80-133.
- Netz.Raviel, *The Shaping of Deduction in Greek Mathematics: A Study in Cognitive History*, Cambridge University Press, 1999.
- Pombo. Olga, "Operativity and Representativity of the Sign in Leibniz", Koslow A., Buchsbaum A. (eds), *The Road to Universal Logic. Studies in Universal Logic*. Birkhäuser, pp. 557-564, 2015.
- Rabouin. David, "Proclus' Conception of Geometric Space and Its Actuality", Vincenzo De Risi, ed., *Mathematizing Space The Objects of Geometry from Antiquity to the Early Modern Age*, Springer, pp.105-42, 2015. .
- , "Les mathématiques comme logique de l'imagination : Une proposition leibnizienne et son actualité", *Bulletin d'analyse phénoménologique*, XIII 2, pp.222-51, 2017.
- Taylor. Charles, "Philosophy and its History", Rorty. R, Schneewind. J. B. Skinner.Q, ed, *Philosophy in History*, Cambridge University Press, pp.17-30, 1984.
- Tosh. Nick, "Anachronism and Retrospective Explanation: in Defence of a present-centred History of Science", *Studies in History and Philosophy of Science*, 34, pp.647-59, 2003.
- Vermeir. Koen, "Philosophy and Genealogy. Ways of writing the history of philosophy", Mogens Laerke, Eric Schliesser, and Justin E. H. Smith (eds.), *Philosophy and Its History: New Essays on the Methods and Aims of Research in the History of Philosophy*, Oxford University Press, pp.50-70, 2013.
- 稲岡大志、「幾何学における記号と抽象——ライプニッツの「幾何学の哲学」の可能性——」、『哲學』、61号、日本哲学会、165-79頁、2010年。

- 、「図形推論と数学の哲学——最近の研究から」、『科学哲学』、47 卷 1 号、日本科学哲学学会、67-82 頁、2014 年..
- 「「新しくて便利なもの」：ライプニッツ数学研究における図形の推論上の機能について」、第 3 回日本ライプニッツ協会春季大会シンポジウム「ライプニッツ数理哲学の最前線」、神戸大学、2017 年 3 月 25 日.(2017a)
- 、「ライプニッツ的空間はいかにして構成されるか？——クラーク宛第 5 書簡 104 節における「抽象的空間」をめぐる」、『日本カント研究』、第 18 号、日本カント協会、90-104 頁、2017 年.(2017b)
- (Hiroyuki Inaoka) , “Mathematics as Make-Believe: Infinity Diagram in Leibniz ’s Mathematical Study”, Kyoto Philosophical Logic Workshop III, 8 September 2017.(2017c)
- 、『ライプニッツの数理哲学——空間・幾何学・実体をめぐって』、昭和堂、2018-9 年刊行予定.
- 植村玄輝、「哲学史研究は哲学的かつ歴史的でありえるのか：過去の主張についての規範的探求という観点からの提案」、『哲学』、68 号、日本哲学学会、28-44 頁、2017 年.
- 納富信留、「始まりを問う哲学史：複眼的ギリシア哲学史への試み」、『哲学』、68 号、日本哲学学会、45-62 頁、2017 年.
- 松田克進、「哲学史研究の哲学的意義：哲学史との間合いの取り方」、『哲学』、68 号、日本哲学学会、9-27 頁、2017 年.
- 山本信、石黒英子、坂井秀寿、「哲学と国境」、『理想』、547 号、pp.2-31, 1978 年.





